

◆連載-Vol.19

現代建築ヤブニラミ

中谷 正人 (建築ジャーナリスト)



執筆者プロフィール

中谷 正人 (なかたに・まさと)
1948 神奈川県生まれ。1971 年
千葉大学建築学科卒業、「住宅
特集」「新建築」編集長を経て
1994 年からフリー編集者。
1999 年~2014 年千葉大学客
員教授。木の建築フォーラム理事、
日本建築学会建築文化事業委員
会幹事

現代建築の開拓者たちとその軌跡 1

1950年代後半から1960年代後半にかけて、さまざまな建築家が活躍した。彼らはミース・ファン・デル・ローエやル・コルビュジエが提唱した現代建築のメソッドに忠実でありながらも、さまざまなバリエーションを生み出した。今にしてみれば、日本の社会や気候風土、民族性に対応しようとしたのだろう。この時代を日本の現代建築の開拓時代とでも名づけようか。

この時代もそうだが視点を建築家に向けたとたんに、状況を含めて時系列で語ろうとするとかなりの混乱が予想される。できるだけ個人の建築家に的を絞ってみることにする。さらにこれから採り上げる建築家はかなりの数に上るはずだ。したがって開拓時代を中心としながら、建築家ごとに現代までを通して記述することにしたいと思う。基本的には私が実際にお会いしたことのある方々である。

村野藤吾の色気

まずは村野藤吾から始めよう。これは私が実際に会った建築家の中で、最年長でもあったからである。1891 (明治24) 年生まれで、1984 (昭和59) 年、93歳で逝去。明治の中期から昭和の終わり近くまでの一生の間、300を超える設計を成し遂げた建築家である。記録されている中で最も古いものは1928年の「日本基督教団南大阪教会塔屋」のようだ。自分で数を数えたわけではないが、折り返し点の設計は75歳のときだったという。

戦後の広島市の「世界平和記念聖堂」以降、いまではビックカメラの店舗となった有楽町駅前の「読売会館／そごう東京店」(1957)、「大阪新歌舞伎座」(1958)、「横浜市庁舎」、京都の「都ホテル (現ウェスティン都ホテル) 佳水園」(いすれ

も1959)、さらには東京・中目黒の「千代田生命本社ビル」(現目黒区総合庁舎 1966) と続く。もちろん、戦前の作品で今でも健在で見学可能な建物もたくさんある。東京・中央区の「森五商店東京支店」(現近三ビルヂング 1931) などは、たまたま先日近くを通りかかり、エントランスホールを見学させてもらったが、モザイクタイルによる繊細なデザインは今でも輝きを失ってはいない。戦前の作品であるが「宇部市渡辺翁記念会館」(1937) も健在で重要文化財に指定されており、一見の価値がある。

兵庫県宝塚にあった「村野自邸」(1942) は残念ながら阪神淡路大震災で倒壊してしまったが、これも震災の半年ほど前に見せていただく機会があった。ご家族の話だと、常にあちこち改装の繰り返しで、いったいどのような形が最終形だったのか不明だという。村野は93歳で逝くまで現役を通じた建築家であった。そして常に新しいことに取り組んでいた。だから自宅は新しいアイデアの確認のための実験場だったのかもしれない。

そう感じたのは、村野がだいぶ晩年になってからであったが、赤坂プリンスホテルの旧館で待ち合わせたときのことである。いつもならば時間を厳守する人であったのが、旧館に泊まっていたにもかかわらず30分ほど遅れてきた。その理由が、メイドさんにベッドメイキングを何度もしてもらっていたからだという。毛布をベッドにセットするとき、どこにいちばん手を触れるかを確かめていた。その部分が擦り切れないように毛布の織り方を指示するためであった。これが終生続いたのである。

1970年以降も衰えることを知らず、むしろだんだんと艶っぽくなってきたと感じる。「日本ルーテル神学大学 (現ルーテル学院大学 1969)」に用いられた外壁の緩やかな曲線は、箱根の「箱根樹木園休息所」(1971) や「川崎製鉄西山記念

会館」「小山敬三美術館」(いずれも1975)、「ハケ岳美術館 (現原村歴史民俗資料館)」(1979)、「新高輪プリンスホテル (現グランドプリンスホテル新高輪)」の客室棟や大宴会場の「飛天」(1982) にも遺憾なく発揮されており、エントランスホールの車寄せは圧巻だ。その翌年に発表された新潟の「谷村美術館」なども小品ながら内外ともに用いられた局面の壁が連続的でありながら空間を分節しており、局面の連続がなんとも艶っぽい。「箱根樹木園休息所」の貴賓室の内装に使われていた薄紫の色は、高貴さという言葉を思い起こさせるほど気品に満ちていた。

また、外壁が地面と接するところでは、木の幹が根元近くで太くなり広がっているのと同じように広げられていて、建物が地面から生えているように見える。このことは大地と建物との関係を意識していたからに違いない。

和風にも多くの名作を残しているが、直接村野から聞いた言葉をいくつか紹介しよう。「和風の建物は軒高から決めます。そうしないと腰高になってしまいます」「(洞床の曲線について) 曲率の違う円をふたつつなげるときには、ぶつかるところにもうひとつ円を転がしてやるんです。そうするとスムーズにつながります」「和室の天井高は、とくに小間では7尺が限界です。広間であっても7尺5寸にするならばよほど慎重にしなければなりません」などなど。

ディテールの細やかさ

仔細にディテールまで見たのは東京・麻布の「松寿荘」(1979) で、美術史家、建築評論家であり村野のよき理解者でもあった長谷川堯とともに、村野に案内してもらったときであった。2層吹抜けの大広間の壁には一面に段通が張られていた。その色と柄を決めるのに、村野は「この前に芸者さんが立ったとき、いちばん派手やかに見えるように気を遣い

ました」という。さらに2階バルコニーの腰壁の上には手摺として水平に数枚の薄い板が載せられていた。その薄い板が、おそらくバルコニーの幅が7~8m近くはあるのに弛みもせず浮いている。バルコニーに上がってよく見たら透明なアクリルがスペーサーとなっていた。これが下からはまったく見えず、薄い木製の板が浮いているように見えたのだ。

ここに取り上げたのはほんの一例に過ぎない。すべてを網羅するにはとてもではないが誌面が足りないだけでなく、私の勉強も不足しているのでこのあたりで切り上げよう。

村野の1%

村野に関する有名な話として、「1%」がある。ご存知の方も多いと思うが、若い人のためにあえて記しておこう。

村野の言葉はこうだ。「本来はお施主さんが設計すればよいのです。そうすれば満足のいくものができます。しかし、お施主さんは図面を描けません。ですから代わりに村野が鉛筆を持ちます。だから私は1%で、お施主さんが99%なのです」その通り。施主のニーズに合わせる事が重要で、それが建築家の職能だ、と思うのは短絡に過ぎる。施主は建築に関しては素人だ。だから施主のニーズといっても素人の言葉でしか語ることはできないし、それが限界でもある。だからこそ、建築家の職能とは施主の言葉の奥にある要望を聞き取り、専門家として具現化することであろう。

村野は1%だというとき、施主も同じように思うかもしれない。しかし私は、村野は99%やりたいことをやったのではないかと思う。施主にそう信じ込ませながら。

村野は決して時代の最先端を走ったわけではない。しかし、時代がとりとめもなく移り変わる中で、自分の流儀を貫き通した建築家であったことは間違いない。(続く)



日本基督教団南大阪教会塔屋
photo by m-louis.©



宇部市渡辺翁記念会館
出典: ウィキメディア・コモンズ (Wikimedia Commons)



川崎製鉄西山記念会館
出典: ウィキメディア・コモンズ (Wikimedia Commons)



村野自邸 (外観)
撮影/筆者



村野自邸 (外庭を見る)
撮影/筆者



村野自邸 (和室)
撮影/筆者